



Title	歌人弁内侍にとっての『弁内侍日記』試論
Author(s)	阿部, 真弓
Citation	詞林. 1995, 17, p. 14-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67366
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

歌人弁内侍にとつての『弁内侍日記』試論

阿部 直巳

『弁内侍日記』は年号、日付を記した羅列的な叙述が続いために「体験した事実や感慨のほどを、その時その時に、記していた」（一）とみなされること久しかったが、近年になり、ようやく弁内侍の執筆意識、編纂意図に言及した論文が現われ始めた。しかし、いまだ研究の余地の多く残された作品の一つといわざるをえない。

例えば『弁内侍日記』に書き留められた和歌については、「当意即妙だが詞書的役目を果す散文がなければその主旨がわからない」、「その場その場の発想によるものが多いい」等、つまりは、機知に富むものの独立した文学性を持たない和歌がほとんどであるとの認識が大勢を占めている。しかし今日、日記作者として名を残している弁内侍は、「続後撰集」以下十一の勅撰集に四五首もの歌が採られた、後嵯峨院時代を彩る女流歌人の一人でもある。歌人弁内侍にとつて、そうした歌を書き留下めた『弁内侍日記』とは何であったのかということを、より深く考察する必要があるだろう。

これまで私は、作品を読み解く切り口として、弁内侍の公的

職務に焦点をあててきたが（2）、今回は歌人という側面に注目し、詠歌における場の問題について考察を行なうこととする。本作品の和歌の特徴とされる「当意即妙」「機知」といった性質は、時と空間を共有する人間の輪によって作られた「場」にささえられて成立する部分が大きい。人事的要素に基づく和歌が多い本作品において、場の問題を看過することはできないだろ。この点に着眼し作品を再読すると、一見単調である弁内侍の場のとらえ方やその詠み方は、決して一通りではないことに気づかされるのである。

右の観点から、寛元四年と翌宝治元年の記事を中心検討を行ない、歌人弁内侍における『弁内侍日記』の存在意義を解くための一試論として提出し、叱正を仰ぎたい。

『弁内侍日記』の章段は、詞書的役割を持つ散文部分と歌によって構成され、①日付・行事次第や出来事等に関する記事、

②詠歌事情（感興を催した事物の指摘及び作者の感想等）、
③歌作者、④和歌、という形式をそこ見て取ることができる。

一例として第二段を掲げておこう。

三月十一日、官庁にて御即位。はるの日もことにうらゝか

侍
なりしに、さまでのきしきども、いはんかたなくめでたし。人へのすがたども、めづらかに見え侍しかば、井内

いやめられなたまゆらにソシキをよぶすがたいそちとせは今日とい

①②に関してはそれぞれ、ごく簡潔なものから、かなり詳細な叙述まで長短の差はあるが、贈答歌を記す章段も含めて、この①②③④が章段構成の基本形と考えられる。

一	二	三	四	五	六
七	八	九	九	八	九
七	八	九	九	八	九
七	八	九	九	八	九
七	八	九	九	八	九

家集的性格も認められるこの作品における和歌の重要性はい
うまでもない。散文部は羅列的記録的に叙事されているのではなく、最後に書き留められた和歌と何らかの関わりを持つてゐるのだが、なかでも歌へといざなう真の導入部として、重要な役割を果たすのが②である。我々は②によつて詠歌の契機を知り得るからこそ、弁内侍の歌をウィットに富むものとして味わうことができる。そこでこの部分に注目し作品をたどっていくと、寛元四年と宝治元年の記事との間には、詠歌状況の傾向に変化が認められるようなのである。

では、ます寛元四年の章段について検討したい。次の表は、寛元四年の記事に関して、②にあたる叙述を抜粋したものである(3)。

申ひでゝ

還御のへちこれをきゝて

風いとすゞしく吹て、御かきがはらおもしるく侍しかば

(菊のさせわた)まことにさきたるやうにみえわたされ

て面白く侍しかば

おりしもあらねはげしく、おそたるけいきいとをもしろ

くてはるかにいさくおしろく見えて河風さえたりしに

うへのをのこども、殿上のおりまづめしけれどもつきた

るよし申ければ、ひる御所のきたむきにて、かれたるは

ぎのえだなどをり松にせられけるとききし、いとやさし

くて

公忠の中将、「大宮の大納言殿のすゞりはせ給」とて

もちてまいりしも、いづくの御文ならんとゆかしくて

返し

返事

ゑじがもんをそくあけ侍しに、「いまにはじめたる事か

。吉田使のかへさに内侍のいらせ給に、ことあたらしく

あけもまうけぬか」とあらかにいさめ申侍しも、かや

うの事や先例にもなり侍らんとおかしくて

摂政殿まいらせ給ひて、御ぐしそがせおはしますに、も

のゝぐにてまいるべきよし仰ありしかば、おりしもをし

いだしのころよしなきよし申て、なへたらんも又いか

シとて

このほどの雪さえとをりたるよもすがら、こと引あかし

給ふときゝしも、ことにいみじくおぼえて

月のさえたる雪のうへはかぎりなく面白くて

こに物いれでになひたるがことになげきて、「さしたる

所へまかるに、かまへていとまたべ」となくやうたいふ

もいとへおしくて

雪だけにぬれぬべくて、衛士○もうへにのぼりて、ゆき

かくおともおもしろくみにとまる心地して

女官ども「弁殿こそまいらせたまひたれ」とて、ひしと

ならびゆて、「そめくさにかさがりて、御事かけはて

なんす」とことゑぐ申侍しかば、「すべてふるわれて、

ものもいはればこそ」とありし、をかしくて

くら人の侍従むねまさが声にて「ゆゆしき月の光かな。

しろうすやうのころこそ思ひやらるれ」といふ。げにか

ぎりなく見ゆれば

あらしはげしくふきて、へだての屏風つゞきてたぼれに

しかば、わたどのまでみわたされたるはれべしさかぎりなくて

ことゞもよくなりて、「とくく」とたびへせめられ

しもたゞがたくて

後にこれをきゝて

宮の事がらも心すみて、ものゝねしらべたるも、おりか

らおもしろくて

中納言のすけどの「たゞなかにて、うたなどにてはからへかし」ときこえしを、さしもの事のまぎれにながめいだしたらん心づきなさ、とをかしくて、心にはかくぞおぼえし。

大宮大納言ひわ、花山院大納言ふえ、兵衛督ひやうし、面白ともいへば中くなり。

大宮大納言殿、常の御所へまいり給て、こうたうの内侍どに「ぱ、そのねはいかゞ侍つる」とありしかば、「かの大ごくでんのびはのねとかやのやうに、いづくまでもくもりなくこそ」と申給もげにかぎりなくて
その夜の事どものめでたさ、いひつくすべからず

せいそだうの月の在明のかげ、あかず身にしみでおもしるきを、人くながめて

大内裏の事おもひいで、庭火ののかげに月のひかりさせて見えしも面白くて

大納言〇、「このせきもりの心づきなさいかゞ思ふ」とおほせられしかば

ありし夜の事思ひいでられて、清涼殿にしつらひたりし所に、少納言内侍とよもすがら月をながめて
「夜はぶけぬるか、うしのくひのほどか」ととはせ給を、たれもなにとも申ざりしを、少納言「心のうちに御返事さだめてありつらん、いかゞ」ときこゆれば
のりのこゑぐいとたうとくて

これを概観すると、「弁内侍日記」にしばしば見られるはすの人事的要因が、存外少ないことに気づかされる。三、五、一四、一五、一六、一七、三一、三二、四〇、四二、四四番歌に關しては、弁内侍の視線は場を彩る景物に注がれて、詠歌へと至る。一六番歌を記す第一二段を見てみよう。散文部全体を見渡せば、宫廷の人々が多く登場しており、彼らの動向が書き留められている。

十月一日、除日ときこえしが、十一日にのびて、土御門院の御忌日とてちんに公事ありて、大宮大納言、万里小路大

納言などまいらせ給へり。職事ども、つねとし、むねまさ、光國などまいりて、御いのり〇事さだめらる。十九日より、金輪法、てんちさいへんなどはじざるべ〇とぞきこえし。奉行咸人侍従むねまさ。おりしもあらははげしく、さえたるけいきいとぞもしろくて、弁内侍 やをよろづいのるしるしもあらはれてあられたまぢるかずも見えけり

宫廷人の存在は和歌と深いつながりを持つが、しかしながら、一六番歌において直接の契機として示されるのは、人事的事象

ではなく自然の景物である。また、作者は場に臨んでいるが、必ずしも人間関係の中にあるて歌を詠するわけではなく、その対象から一定の距離を保ち、第三者的な叙述を行なっている。

注目されるのは、宫廷の人々の様子、または場そのものが歌の対象となっている一、二、七、一八、一九、二六、三五、三七、三八、三九、四六番歌についても、こうした特徴が看取できる。以下にあげる三五番歌は、人々の演奏する楽の音に触発されて生まれた和歌だが、彼らや、ともにいるであろう周囲の内侍達との交流を通じて誕生したものではない。

その夜は、ちこのまつりの使にたちたりしに、顯朝の弁、院の推参えんすいなどはてゝ、まいりたりしかば、あかつきになりて、宮の事がらも心すみて、ものゝねしらべたるも、おりからおもしろくて、弁内侍

こよひしもいかなる神のちかひにてものゝねならすあ
とゝなりけん

(第二二段)

また一八番歌や一九番歌の②を見ると、人の行動等は作者のごく身近なところで繰り広げられていると解釈されるのだが、発せられた歌は「しもがれのふるえのはぎのをりまつはもえいづる春のためとこそみれ（一八番歌）」、「あけやらでまだ夜はふかき雪のうちにふみゝるみちはあとやなからん（一九番歌）」と外界へ向けられたものではない。弁内侍の意識内では、自己と歌の対象となる人々との間に距離があり、和歌は人間關係を紡ぐ役割を果さないのである。

弁内侍は宫廷をめぐる人々を賛美し、その感情は歌となつて発露されるが、一連の営みは集団の外において行なわれている。地の文の中に書きあげた「場」の中に、自己の姿は存在せず、したがって和歌も、人間関係から隔絶した位置から把握した状況に基づき、詠じられる。その結果、歌は人との交流をとりもつためや座を盛り上げるための小道具として機能せず、弁内侍のごく個人的内世界の中で思つく「独詠歌」となる。当年の和歌の特徴は、三六番歌に象徴的にあらわれていよう。「場」中からわき出たはずのこの歌は、弁内侍の心中にとじ込められてしまうのである。

さらに付け加えるならば、実は②からは、詠歌の時点を示しているのか、それとも単に作者が着眼した事象について説明しているだけなのか、にわかに判断できないことは特筆してもよいだろう。当年の和歌については即時性がさほど強いとは認められず、從来評されるところの「その場かぎりの発想」によるものとは必ずしも言いきれない。即ちここに書き留められた和歌は一時的な感興によるものではなく、弁内侍の思い入れや意図がかなりこめられた作品とみなすことができるのではなかろうか（4）。

以上の点から推察するに、文学的に評価できるか否かはまた別問題として、弁内侍は、詞書には過度に従属しない、ある種の独立性を保った歌を書き残すよう努めていると考えられる。作者の和歌重視の姿勢についてはすでに指摘があるが、特にこ

の寛元四年に関しては、散文部とセットにして醸し出すおもしろさよりも、和歌そのものを尊重する姿勢が強く看取され、読者側にもそれを期待する作者の意識が窺われるのである。

さて、「この作品には少将内侍の和歌も多い。この寛元四年においては、四、八、一〇、一三、二一、二三、二七、三〇、三番歌の十二首が収録されているが、これらに關しても右の特徴はみられるのであらうか。

九番歌は頭中将の人柄を雨模様になぞらえる歌、また二三番歌は大嘗会の際、準備の遅れた少将内侍への催促に対する和歌で、これらはまさに人間関係の上に成り立つ、機知に富んだ歌といつてよいだらう。しかし、四、一〇、二七番歌は、景物に着目した和歌、また、二八、二九、三〇番歌は臨場的位置での詠歌と解釈されるが、「身にをへばさぞ思ふらんだけのこのをはなつよの心まよひに（二八番歌）」、「あはらなるいたやのゝきのしらゆきのかくばかりなどぶりむるらん（二九番歌）」、「ことのはもおもふにさこそなかるらめ吹とふくよの風のけしきに（三〇番歌）」と、それぞれ「独詠歌」とみなされ、以上の和歌は、弁内侍歌と同様、集団外の視点から詠じられたものと窺われる。

半数ほどを占める弁内侍との贈答歌に関しては、第七段を見ておきたい（5）。

五月の廿日あまり、有明の月くまなくて、ことにおもしろく侍しに、御ちよくろにて御連歌ありしこそ、いとやさし

く侍しか。た家、ためづばかりにて、人○^おずもすくな
りしかば、いとしまざりし程○、「このついでに、こうた
うの内侍のびはをきかばや」とおぼせ事ありしかども、月
もいりがたちかくなりて、みなかへり侍にし。なりおほ
くて、つりどのゝかたにやすらひて、弁内侍

月を見ておもひもいではをのづからしのばれぬべきあ
りあけのそら

返し、少将内侍

思ひいでむのちとはいはじいまのまのなごりの

有明の月

この章段においても数名の貴族達が登場するが、最後に書き付けられた和歌はそれらの人々との関係から誕生したのではな
い。彼らが退場した後、まさしく他の環境から隔絶した、弁
内侍と少将内侍の二人きりの世界から、わき上がった和歌であ
る。また散文部の内容からは即詠歌と判断されるが、アドリブ
的に奇てらつたものではない。この章段からも、二人の共通
した感情から発せられた和歌そのものを鑑賞してほしいという
作者の意識が窺われるるのである。

右の如く、贈答歌については一人共通の視点という、いささ
かの相違点はあるものの、少将内侍歌においても、先に論じた
特徴が顕著にあらわれている（6）。なお贈答歌の問題に關し
て付記すると、寛元四年中の贈答歌一二首の内、弁内侍姉妹以
外の贈答歌が藤原公相と少将内侍による二首のみであることは、

寛元四年の和歌が内向的傾向にある」とを示す一事象として注目されよう(7)。

（7）。

以上、寛元四年中の章段を見ると、作者はしばしば遠隔的視点から「場」をとらえて詠歌を行なっており、この年に關しては、従来の批評とはかなり異った側面を見せておりといつて差し支えあるまい。「機知や笑いにつながる、当意即妙のコミュニケーションの手段」(8)としての和歌ではなく、外界との交渉機能をもたない独詠歌がその大半を占めるのである。

ところが、第三一段をもつて幕を下ろす寛元四年の記事は、終わりが近づくにつれ、その様相に変化の兆しがあらわれてくる。四三、四五番歌は、それまでほとんど見られなかつた、人間関係の上に成り立つ和歌である。また、先に触れた三三番歌を記載する第二一段を改めて掲げてみよう。

少将内侍、くる木のやへむかひて待けるに、かみあげのぐをとりをとして、官庁のつばねくひにたびににたびたりしこ、これにもさしあふほどにて、かなはざりしかば、ことごもよくなりて、「とくく」とたびくせめられしもたへがたくて、少将内侍
しばしまでうちたれがみのさしごしをさしわすれたる

時のまばかり
後にこれをきて、弁内侍

さしごしのさしあふ程の時のはうちたれがみもわれ
ぞみだれし

弁内侍が後に歌をつけることで二人の世界に収斂していく点では他の贈答歌と共通するともいえるが、まず外界との関わりから少将内侍の歌が導き出されており、これは寛元四年の贈答歌の中では異質なものとなっている。

以上の如く、散文部によつて状況を把握しなければ、意味をなさない和歌がにわかにその數を増していくのである。こうした現象からは、弁内侍の意識に何らかの変化が生じたことを窺わせる。その様相をより明らかにするため、次節では、翌宝治元年の記事を検討していくことにしたい。

二

宝治元年の章段の検討を行なうにあたり、同じく②の部分を抜粋した表を掲げておく(9)。

三 吻
警
警
はいらいのけいき、ことにめでたくて

三 吻
警
警
ないべんのよそをいやしくみえしかば

なぐさのわざるを覗て

1

職事頭弁職事、そうたてまつる程、おりしも月くもりがち

104

にして、なにとなくものあはれなれば
奏○たてまつるを、御ゆどのへうへにて、少将内侍みて
、ちやくたうせられたる○かやかみのさうしのつまをや
りてかきつけゝる

104

光国申いで、返まいらるべきよし申侍しに、「なにと

104

され日本に「こいの事」でありしかくも
微かれま

104

餘寒のかぜも猶さえたるくれ竹に、ひはてりながら、ゆ

1

すひでが、ハヒオノニモ、思ひよそへらるれ。さすが老

1

西ヨリヨリ此地ある1804年「な山那」金れば

三七

言たち、いかにゆゝしかりけん。さてこそ、てる中将、

1

ひな祭りに一かじりを食ふが、おひなが、おひなが、おひなが

1

「れけめ」など、ふる事あたりいで○給も、げに思ひやら

1

花もさかりにいとおもしろきに、おりしも、大宮大納言

1

まいり給。なをしそがた、つねよりも心ことし〇にほひ
きたるをもむだはあらし
ふかくみえ給しかば

-

「中宮の行啓は、やよひの月のころなれば、その程に人づぬれば、「こよひはくわんそうとて、ちんに公事ありて」といふことはなり。なにとなくおもしろくて殿より、かへでの枝にてまりをつけてまいらせさせ給たるを、中納言のすけどの見たまひて、「こそ、さきのとるより、ふねにまりを十つけられてまいりたりしにこそ、思ひいでらるれ」とて、なわとなく「ふねどとさりはれを一でになして返す人のあれかし」ときこゆれば猶ぞ恋しき」とくちずきびたまへば、弁内侍、「みなとがはなみのかゝりのせとあれて」とつけたりしを、「」よしきしも、いとあはれにて、少将内侍さとなりしに申つかはし侍し。

五	吾	呪	哭	罷	哭	盟	
盍	齒	三	吉	奄	盍	盍	
五	毛	奏	奏	奏	吾	五	
五	毛	奏	奏	奏	毛	毛	
金	齒	全	八	合	充	矣	

しおろさせ給ふとき、しおりしも、あめぶりて、いとあ
はれなりしかば、少将内侍のもとへ
返事

みかはみづに山吹のはなのながるゝを見て、大納言、「
新吉野川とみゆるものかな」ときこゆるを、御ゆどの、
うへには、人／＼も「いとおもしろくこそ。などとまれ
申さばや」などありしかば、心のうちに
太政大臣殿北山にをはしますほど、女房たち、郭公のは
つねたづねにおはしましたりけるに、甲斐／＼しくき、
て、
院の御所の左衛門佐、御ともにまいりたりしが、「わが
心のうち歌によめ」とありしかば
きゝもしらぬ論議のこゑも、結願はなにとなくなりお
ほくて

花山院宰相中将まゝべ、いろにてこもりるられたりしに、
南殿のたしばなさかりなりしを、一枝おりてつか○すと
て、兵衛督どにかはりて
返事

あかつきの御時のかねのこゑきこゆれば「もんして、た
ゞいまふかくなげきつるつみもつかぶらんとおぼえて、
いとたうとくて
「はやこのあか月、りやうせんにて世をそむきぬ」とき
くも、むかしものがたりをきく心ちして、あはれさかき

けふはひるばんにまいらましものを、くまのゝみちのほ
どにてやあるらんとあはれにて、大納言どのに
「土御門大納言の事、あはれさ○ころある人のめでぬは
なし。うき世をしらぬ人は、ちくしやうに、人のかはを
させたるとこそきゝ侍れ」といふも、げにかなしくて
ことにくま○く見ゆれば

内侍たち月ながめて、「なに事も物をまつよ、ひさしき
やうにおぼゆる。夜もすがらもながめあかしてのみこそ
あれども、これまで公事と思へばこゝろもとなき」な
どいひて
御遊どのゝうへに少将内侍候しに、女主してかくきこえ
たれば、かへし

中宮の御方よりまいりたりし御たき物、世のつねならず
にほひうつくしう侍しかば

院の御所の弁内侍、こうたうの内侍のもとへ、「はぎの
との萩はさきたりや」と尋られたるに、一枝をりてつか
はすとて、こうたうのないしにかはりて
かへし

「ゆゝしきみちの人／＼詩つくりてあそぶらんこそゆか
しけれ。などかこの殿上などにてなかるらん。さもあら
ば、たちきゝてん」など、人／＼おぼせ○れしかば
「又みるかけのなかるらん」といふふる事の御くちずさ

みにまゝこえしも、いとあはれにて
あきとのもの弁「十五夜にはをそれをいたまきましたる月
哉。内侍たちこれにか」とて、夜部の月のくもりたりし
も身とのがのやうにうれへありくもをかしくて
ひきわけのつかひは公保の中将ときこそえしがにはかに
きやうぶくになりて、まいらぬよしきかせをはしまして
、「たれならん」と御たづねありしに
「たゞいまはなにの時ぞ」と御尋あれば、「おきてるの
時」と申給へど、よるのをとゞには、内侍もねなんとせ
しかば、るよりかふけぬらんとて
はなもさかりにおもしろきた、きりたちわたりて、おり
しもかりのなきわたり侍しかば
こうたうのないしの、つまの局にてよもす○らびはひき
あかし候ましを、ま按察三位殿、「心のうち思ひやられて
とこそおもしろけれ」とおぼせられしかば
あかつぎがたにもなり○しかば、御ちよくろへいらせ給
しに、ま兵衛督殿、御なごり申さばやとあらまして
按察三位殿きかせ給て、「いとおもしろかりける」とか
な。かはをへだてたる恋といふ題にて歌よめ」とおぼせ
られしかば
大納言殿、ま按察のすけどの、中納言のすけ殿、少将、弁
、歌をつきてあそび候しに、こうたうのないしどのは、
「まじらじ」とて、つまのつぼねにて、ことひかるとき

「たかつんじといふ女主にかくいはゞやとおもふ。ひば
」とて
女主にかはりて
権大納言見給て、「かしらけづらす」とぞあかくさげなれ
」ときいそしを、「いとをかし」と人へおほせられし
かば

左衛門督近書「おりてまいらせられたる枝のへり」「まだお
りてまいらせよ」とおほせ事ありしかば
「いられにても、ことに見えん一えだおりてまいれ」と
おほせ事あれば

左大臣殿近書御ともにまいらせ給たりしが、御ぶんとて
、いだされたりしくしを、御ふところへいるよましにて
、さながら御袖のしたより*をとさせ給し御事がら、いひ
しらず見え給しかば

人へことにもてなして、かさみのそでなどつくるひ侍
るもめとまりて

めしにすゝみて侍し御階の月わすれがたきよし、中納言
のすけどのに申いで、
権中納言、五節いださるゝときへて、くしこひたてまつ
るとて
返し

歯	きなくて
二八	「いざ、おりくに歌よまん」ときこえさすれば
二九	いつしかいかにとおもへば、「なかやす」謄になりたる よろこびや」ときくも、うつりかはるほどなさおかしく て
三〇	れいのさまべくおもしろき御遊ども侍しに、「いづれか ことにおもしろくおぼゆる」と人へおぼせられしに、
三一	少将内侍、左衛門督のことの音、なをすぐれてきこゆる

右の表を概観するだけでも、寛元四年とは一転し、人事的契機から詠まれた歌がかなりの割合を占めていることが読み取れ、そこには弁内侍の大輔な意識変化が窺われる。

宝治元年には多彩な内容が盛り込まれていて、いくつかの型に分類することができる（10）。

I 意志伝達の手段としての和歌……五三・七六・九一・九九、
一〇〇・一〇一・一〇四・一一二・一一三

II 代詠歌……七〇・七一・八一・九八

III 集団心情の代弁歌……五七・六一・八四・八七・九三・九四
・九六

IIにおいて特記すべきは、後嵯峨院の代詠として記す七〇番歌である。この歌を記載する第四七段は、記録所行幸の際行なわれた五節のまねを描写した章段である。貴顕の様子の素晴らしさを語った後、院御所の左衛門佐からの要請を詠歌の経緯

三二	よし申て
三三	「五せちのまねのいだしうたは、なをまさりてこそ」と て
三四	「さすやをかべのまつののはの」〇かへすべくなめたま ふもみゝにとまりて、きく人もやらんとおぼえて
三五	左衛門のちんのはしに、霜のしろくさえたりし、さむく 、つめたさかぎりなかりしもおもしろくて

として記すが、「いとはじよいづかたよりもたづねとへあかぬ
なごりにきなばかへさじ」という歌の内容等から考えても、こ
れが後嵯峨院の仰せであったことは明らかである。ごく簡潔な
表現の中に、歌人としての自負と誇りが窺える章段といえよう。

IIIは、IとIIをあわせるが如き性質を有する。弁内侍の気持
ちであるのと同時に、場の総意でもある内容を詠んだ歌で、宮
廷集団の代詠歌とでも換言できようか。例えば八四番歌は、祝
奠に対する人々の思いを「みちしあらばたづねぞきかぬしきし
まや山とにはあらぬからのことの葉」と、鮮やかにまとめあげ
たものとなっている。

この他、按察三位の出題による九五番歌や、後掲の、折句に
関するわればめ譚を伝える第七一段に記載された一〇九、一一
〇番歌等も、宮廷人の間を取り持つ座興としての和歌とみなす
ことができる。

臨時のまつりの御むま御らむの夜、大宮大納言まいらせ給て、御所にをかれたる風流に九十くもといふこゝへしたるたなをみたまひて、「あれをかくしないと、人のうたよみたりける、なにはうく、しうくもえせじとかや」などいひてわらひ給ふ。「いざ、おりくに歌よまん」ときいえされば、「いとこそはやけれ。かへるはなにからとかや〇のやうに、かゝるこはき」とこそなけれ」とて、大納言殿

くるゝ夜はしのゝはぐさのうは葉までくだくるつゆの
あるしぐれかな

少将内侍

くものうへやしるきみかきのうちにのみくるゝよすが
らあるやとのもり

弁内侍

くれたけのしもをく夜半のうは風にくもらぬ月のもの
を見るかな

また贈答歌については、少将内侍とは十首で寛元四年と変化しないが、他の人物とかわした歌は十五首に増加し、西園寺実氏・藤原師継・院御所の弁内侍・藤原隆親・藤原公親・大納言らとの歌が収録されている(11)。こうした事象からも、作者が宮廷人との繋がりを重要視していることが確認できよう。

作者と「場」との距離感が特徴的であった寛元四年と異なり、宝治元年に関しては、いきいきと本領を發揮する弁内侍自身の

姿を人間関係の網の中に見出すことができる(12)。外交的和歌を武器にして、場の中心で活躍する弁内侍。いやむしろ弁内侍が人の輪に参加し、和歌を投げ掛けたその時、「場」が生成されたのだというべきであろう。彼女の歌によって、人々は互いを結ぶ時空を認識し、一つの場を成立させる。作者は宝治元年については、歌の作用という付加価値にも意義を認めた執筆を行なっていると推察されるのである。

三

寛元四年と宝治元年との間に、和歌の性質や作者の意識の点で、明らかに懸隔が認められる。叙事上の如き「弁内侍日記」の変化をもたらした原因は、いったい何であったのだろうか。

第一節に述べたように、当意即妙性を有する歌は、すでに寛元四年末から増加しはじめており、厳密を期すると臨界点はそこに求められる。即ち後深草天皇即位関連儀式の終了との関わりが認められることから、一つには弁内侍の職業意識に運動した変化と解釈することができよう。寛元四年にみられた作者の視点は、祝賀的行事の記録者としての強い役割意識に基づくものであり、詠歌活動もそれに引き付けられた形で行なわれていたが、一連の行事が終わるのにともなって、次第に視線は宮廷の日常生活へと移行したため、収録話題にも変化が生じたとの推論が導かれる。

ただし、この変化は、弁内侍のやや個人的的事情に絡む問題としてもどうえられるべきであろうと考える。彼女に対する歌人としての要請の増加が、変化をさらに促したという可能性を指摘しておきたい。

ここで、節目と見られる起筆一年目の宝治元年が、弁内侍姉妹にとつていかなる年であったかをおさえておく必要がある。以下、現在確認できる宝治二年までの弁内侍の詠歌活動及び連事項についてあげることとする。

寛元元11・17

河合社歌合に、父信実、姉藻壁門院

少将らと共に弁内侍、少将内侍出詠。

道家家秋三十首に、信実、藻壁門院

少将、弁内侍、少将内侍ら出詠。

『弁内侍日記』の記事始まる。

宝治元前半期（？）

宝治百首の題と初度詠進者決定。信

実選ばれる。

夏～初冬（？）

宝治百首後度詠進者決定。弁内侍、

少将内侍選ばれる。

院御歌合。信実、弁内侍、少将内侍

ら出詠。

一一・18

この時点までに、二四人が百首詠進。

1・19～秋以前

信実、弁内侍、少将内侍他一六人百首詠進（13）。

為家に続後撰集撰進の院宣。

7・25

宝治元年、弁内侍姉妹は、続後撰集撰進の準備行事である院御歌合、宝治百首のメンバーに選ばれている。院御歌合に参加した女性を見るに、俊成卿女、下野、嘉陽門院越前、承明門院小宰相という、勅撰歌人としてすでに名をあげた錚々たる人物が名を連ねている。宝治百首も同様に、俊成卿女、下野、承明門院小宰相、藻壁門院但馬を始め、初度詠進者には当代を代表する女流歌人が選出されている。弁内侍姉妹は後度決定者とはいえ、女性としてはこの二人のみが選ばれていることや彼女達のそれまでの歌人活動を勘案すれば、まさに大抜擢であったといつてよいだろう。

これらへの参加は即ち、彼女達の前に勅撰歌人への道が大きく開かれたことを意味する。弁内侍姉妹にとつて、この二行事がきわめて重大な契機となつたことはもちろんだが、それ同時に、この人選が彼女達の周辺へ及ぼした影響は決して小さくなかつただろうと考える。

歌人として誉れ高い信実、藻壁門院少将を父、姉に持つ弁内侍姉妹はすでに歌人としての活動を始めていたものの、そこには歌詠みの娘、妹という見方が終始つきまとつていたに相違ない。事実、寛元期の詠歌活動は父、姉の存在が大きいことを窺わせる。気のきいた歌を詠める者として評価は決して悪くなかつただろうが、周囲からは、いまだ成長過程にある歌人としてみなされていたのではないか。ところが、一大行事参加者に選抜され、その歌才が公的に認知されることにより、宫廷における

る歌人弁内侍の評価は、変更を余儀なくされる。必然的に、彼女への対応も変化していくはずである。

その跡を『弁内侍日記』中にたどると、例えば、七〇番歌としてみられる後嵯峨院の代詠歌は、弁内侍の評価をあらわす事象として指摘することができよう。九五番歌を記載する第六五段は宝治元年九月の記事であるが、まさに院御歌合の完成時期、また宝治百首詠進にむけて作業が行なわれている時期と重なっている。題詠の仰せは、弁内侍がこれらに関与していることを意識した上ででの要請であったと読み解ける。その他、第七二段の公相の発言は戯言めいてはいるが、弁内侍が歌人として高く認められていることを示す客観的事象としてとらえられよう。院御歌合、宝治百首に出詠する機会を得たことは弁内侍に自信を与えるだけでなく、彼女に対する宮廷人の認識、応対の変化をもたらした。和歌を介し、また改めてはりめぐらされ、あやなされていく人間関係の広がり。弁内侍は、そうした集団の中での役割を認識する機会を得ることとなつた。即ち、かくの如き動向は、宮廷という場における自己の再確認を弁内侍に促したのではないか。

こうした観点から『弁内侍日記』を読めば、宝治元年の記事はまた別の意味合いを持つようになる。

口は、単に事実として記録されたわけではなく、宮廷における己が歌才の評価の高さを示唆するためである。同様にⅢからは、詠歌行為は必ずしも自発的行動ではなく、周囲の期待や要

請をうけてのものであったという作者の自負を看取する必要があろう(14)。また第七二段が時間構成を逆転させてまで、大宮大納言公相の言葉を記していくことも説明できる。弁内侍の即吟に対する彼の驚嘆は、宮廷における彼女の位置を示すためには非とも必要な事象だったのである。

つまり、以上の記述の根底をささえるのは、宮廷において自分が他人からどのように映っていたのか、どのように遇されたのかということ、即ち歌人としての客観的評価を照射しようととする意識なのである。こうした章段では、自在に詠み出された歌の面白さに目を奪われがちだが、それよりもむしろ場における自己の位置の確認が、ここでは重要なテーマであったと読み取らねばならないのではないか。

換言すると、寛元四年の記事においては、和歌そのものによって、歌人としての評価を読者に仰ぐ意図があるのでに対し、宝治元年以降の記事では、それもさることながら、散文部と和歌をセットにすることによって、歌人としての有能ぶりを示し、ひいては宮廷という場において求められる歌人としての姿勢を浮き彫りにする思惑が存すると考えられるのである。そうした意識の相違が、『弁内侍日記』の話題の性質的・数量的变化といふ形となつて表れたのだとみなせよう。

この二つの意識は一見ベクトルが異なるものの、しかし歌人として生きる自己を描きだす営みである点において同方向を目指しているといえよう。『弁内侍日記』は弁内侍にとつては歌

詠みとしての自己のあり方、考え方を表出するためにも重要な場だったのである。

以上、「弁内侍日記」における寛元四年から宝治元年にかけての変化の様相とその要因について検討を行なった(15)。弁内侍を歌人という角度からとらえた場合の「弁内侍日記」の位置付けには、本作品成立の問題との関わり等を含め、いまだ幾段階もの手続きが必要となるが、今後さらに検討を続けていくたい。作者にとっての「弁内侍日記」の存在意義に関する試論を示し、本稿を終えることとする。

注

- (1) 大内摩耶子氏「弁内侍日記考」(『大阪府立大学紀要』一二 昭和三九年二月)
- (2) 「『弁内侍日記』作者の執筆意識—天候記事をめぐって—」(『語文』第六一輯 平成五年九月)、「『弁内侍日記』における人物描写—九条家を中心にして—」(『詞林』第一四号 平成五年一〇月)
- (3) 二〇、二二番歌には、(2)に該当する叙述はない。一五番歌()は筆者注。
- (4) 和歌から窺えるこうした意識は、弁内侍の職掌意識と深く関わりを持つと思われる。この問題については、(2)に掲げた拙稿『語文』第六一輯収録論文において検討を試みた。

(5) 弁内侍と少将内侍の贈答歌は、七一八、一〇一一、一一一三、二二一一三、三三一一三四番歌である。

(6) 森田兼吉氏が、少将内侍歌を記す章段は「少将内侍の視点に立った、あるいは少将内侍の書いたものをほとんどそのまま利用した」(「『弁内侍日記』論」—弁内侍と少将内侍—)『日本文学研究』二六 平成二年一月)ものも多いと指摘されるように、弁内侍と少将内侍の視点が同化する現象がしばしば見られる。

なお、二人の贈答歌のうち一組は本節に論じてきた特徴を持たないが、それについては後述する。

(7) 公相と少将内侍の贈答歌は、二〇一一番歌である。

(8) 村田紀子氏「『弁内侍日記』」(女流日記文学講座第五卷「とはすがたり・中世女流日記文学の世界」勉誠社 平成二年)

(9) 六八、六九、七八、八九、九〇番歌には(2)に該当する叙述はない。一〇九、一一〇番歌は、一〇八番歌に同じ。

(10) 以下、I II IIIにおける漢数字は、歌番号を示す。

(11) 少将内侍との贈答歌は、五一(少将内侍)一五一、五八一五九(少将内侍)、六二一六三(少将内侍)、六四一六五(少将内侍)、七九一八〇(少将内侍)番歌、他の人物との贈答歌は、六七(西園寺実氏)一六八(少将内侍)一六九、七一一七三(藤原師継)、八二一八三(院御所の弁内侍)、八八(藤原隆親)一八九(少将内侍)一九〇、九

七（藤原公親）一九八、一〇五—一〇六（大納言）—一〇

七番歌である。

（和泉書院 平成元）による。

（あべ・まゆみ 本学大学院博士後期課程）

(12) こうした様相は、宝治元年以降にも引き続きたことがで
きる。そのため、「弁内侍日記」の和歌全体のイメージが
「当意即妙」、「機知」と切り離せなくなってしまってい
るのだと考えられる。

(13) 宝治百首選事項に関しては、安井久善氏「宝治二年院
百首とその研究」（笠間書院 昭和四六）を参考にした。

(14) 以下にあげる第三〇段にみえる少納言の発言からも、そ
うした意識の片鱗が認められよう。

夜ふけて、殿まいらせたまひたりしに、かみあげの内
侍にて少納言とふたり、大ばんどころに候しに、「夜
はふけぬるか、うしのくひのほどか」ととはせ給を、
たれもなにとも申〇ざりしを、少納言「心のうちに御
返事さだめありつらん、いかゞ」ときゆれば、弁
内侍

うたゝねにねやすぎなましさ夜なかのうしのくひ
ともさしてしらずば

(15) 登場人物の描写を検討することによっても、両年の間に
意識の変化が窺われる。それについては、(2)にあげた
拙稿「詞林」第一四号収録論文を参照されたい。

『弁内侍日記』の引用は、今関敏子氏編「校注 弁内侍日記」